

の義にかなへて、よみを定め用ふる事となれりしは、いつの頃よりか始りけむ、万葉集天平寶字二年正月三日<sup>子戌</sup>の肆宴の時詔を奉てよめる、大伴家持卿の歌に、始春乃波都禰<sup>ハツネ</sup>とみえたるは、初子なり、また同集に、卯字を字の借字に用たるも、支のよみによれるなり、又申をマシの借字に用ひたり、そのかみ、支のよみに、マシと唱びけるを、後にサルと唱ぶこと、なりぬるにや、但しもとよりサルとよみたりけるを、わざと轉じてマシに當て、書くまじきにもあらざれば、さだめては論ひがたけれど、申を猴に當たるよみなることは著し、然れば初子の歌よめる天平寶字のころ、十二支のよみは、はやく定まりて、此歌よみ給へる天平寶字二年に當れり、世に普き唱とはなりたりし事明なり、その十二支のよみをそなへて、唐肅宗が世の二年に當れり、中納言兼輔卿集に、四隅を物名歌にて知られ、さてその十二類の中に、鼠をネ、兔をウ、蛇をミとよむは、なべてはいはざる言のごとくなれど、和名抄に、鼠禰須美とよめるに、また麤鼯小鼠也、乃良禰などみえ、<sup>野鼠</sup>又兔を宇佐木とよめるに、兔字を、古事記その外の古書どもに、字の借字に用ひたれば、玄か單言にもいへりしなるべし、蛇をミといへる例は、いまだみあたらずれど、和名抄などに、蛇倍美とよめるに、准へておもへば、さもいひけむ、雞は、古事記の歌詞に、爾波都登理とみえたり、又爾波登理ともいふは、古も今もつれなり、但し、玄か單言なるかたを、ことさらに選びて用ひたりげにきこゆるは、十二支の名を、連唱ふる音便のよからむために、定めたりしにやあらむ、かくておもへば、干支をとり用ひ始給へるは、はじめつかたの御世には、鼠牛などいへる説によれるよみをば、用ひ給ふべくもあらざるめれば、干支ともに、字音にて唱ふる例なりけるを、後に皇國言もて唱ふべく、そのよみを定めて、世に行はしめ給ひたりしにぞあるべき。

〔太皞古曆傳<sup>三</sup>〕支干の起原は、五行大義に、支干者因五行而立之、昔軒轅之時、大撓之所制也、蔡邕月令章句云、大撓採五行之情、占升機所建、始作甲乙、謂之幹、作子丑、謂之支、支干者、枝幹也、相配成六句、